

ディックス, D.L.の生涯とその業績(補遺) : ディックスの日本への影響 森有禮とDix、京都府癲狂院

著者	栗栖 瑛子
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	8
号	1
ページ	31-38
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000176/



資料

ディックス, D.L. の生涯とその業績 (補遺)

—ディックスの日本への影響—森有禮と Dix、京都府癲狂院—

The influence of The Work of Dorothea Lynde Dix to Japanese
Psychiatric Care (A Supplement)

栗栖 瑛子

Eiko KURISU

キーワード：ディックス, D.L., 人道的処遇, 精神病院等の設立, 森有禮, 京都府癲狂院

Key words : Dorothea Lynde Dix, Moral Treatment, The Influence of Dorothea Lynde Dix to
Japan, Arinori Mori, Kyoto Psychiatric Hospital

先の稿で、Dix 宛に森有禮から「日本で最初の公立精神病院を設立することができた、さらにもう一つ東京に病院を設立することができるだろう」という手紙が届き、老後の Dix は自分のこれまでの精神障害者処遇改善の活動が太平洋を越えて認められるようになった証として大いに喜んだ(Tiffany, F. 1891)、Wilson, D.C.(1975)、Colman, P.(1992)、Gollaher, D.(1995)と述べました(栗栖, 2014)。

繰り返しになりますが、森有禮の手紙は以下の通りです(石井, 1969; 大久保ら, 2004; 大久保ら, 2015)。

「余が親愛なるディックス嬢、久しく通信不申上、御身が深き熱心に居ます事業に関して、なほざりにせしと思召すこと勿れ、私事その後多くの日時と注意とをこの問題に注ぎ、終に京都にて一つの癲癲病院を首尾よく設立いたし、今また東京にて更に一つ設立中に有

之、遠からずこの善事のために開かるべしと存じ候、此外尚追て設立可致、願わくば多くの不幸者をせめて少しにでも減ずるの便りとならんことをと、熱望致し居り候

1875年11月23日

日本東京にて 森有禮

この手紙に述べられていることは、森(25歳)が1871(明治4)年、最初の日本の外交官少弁務使としてアメリカに渡ってから、1873(明治6)年7月ヨーロッパ経由で日本に帰国し、2年後に特命全権公使として1875年11月24日品川から清国に向けて出帆する間に書かれ、さらにこの手紙の日付は、清国出発の前日になっています。

アメリカから帰国後の森は公私ともに多忙な日々を送っていた(大久保ら, 2015)ので、この手紙のみで、石井(1969)、小峯(1999)、小俣(2000)らの言うように Dix の影響が日本

受付日 2015年12月10日 受理日 2016年1月28日

元佐久大学大学院看護学研究科 Former The Graduate School of Saku University School of Nursing Science

に及んだとするには、実証性が乏しいと考えられます(浦野, 1982; 佐々木, 2004; 栗栖, 2014; 大久保ら, 2015)。森有禮がいろいろ加減なことを書いたとは考えられません。

では、森は何時、どこでDixに会い、具体的に京都府癲狂院設立にかかわったのでしょうか。

この謎を解くには、まず森有禮の経歴(大久保, 1972)をたどることから始める必要があると思います。

I. 森有禮の経歴とDixとの出会い

1. 幼年～青年時代

森有禮は、1843(弘化4)年、薩摩藩士森有恕の五男として生まれ、幼名を助五郎、後に金之丞と称し、明治3年以降公私ともに有禮と名乗りました。

7歳: 1853(嘉永6)年6月、米国提督ペリー率いるアメリカ艦隊が浦賀に来航し(黒船来航)、同年7月にはロシア使節プチャーチンが長崎に来航するなど、徳川幕府の鎖国政策は危機的状況に陥り、世情も不安定な時代となってゆきます。

8歳: 1854(安政元)年3月、徳川幕府はアメリカと和親条約を結び、ついでイギリス、ロシアとも和親条約を締結しました。

12歳: 1858(安政5)年、薩摩藩の藩校造士館に入り、漢学を学びました。1858年には「安政の大獄」が始まっています。

14歳: 1860(万延元)年、林子平の「開国兵談」を読んで洋学に志し、密かに上野景範に英語を学びました。

18歳: 1864(元治元)年、城下に新設された開成所に入り、英学を学びます。

2. イギリス留学からアメリカへ

薩摩藩は生麦事件(1862年9月)の賠償問題を巡ってイギリスと対立し、1863年8月イギリス艦隊と激しい砲撃戦を交え、鹿児島城下

の北部を焼かれ、多くの砲台が壊滅的な損害を受けました(薩英戦争)。この戦いでイギリス海軍の捕虜となった五代才助(後の五代友厚)は、この状況に危機感を抱き、薩摩藩に今後の国づくりに対する上申書を提出しました。この中にイギリスへ留学生を送り近代化への人づくりをするという提案をしました。この提案は藩内の多くの賛同を得て、将来の人材育成を目的とした留学生派遣政策が立てられます。

この留学生に選ばれたのは次の19人です。

1865(元治2)年、薩摩藩は、極秘裏に新納刑部(石垣鋭之助、大目付、33歳)、松木弘安(出水泉蔵、御船奉行、33歳)、堀壮十郎(高木政次、英語通辞、21歳)、町田民部(上野良太郎、開成所掛大目付)、町田申四郎(塩田権乃丞、民部の弟、開成所諸生、19歳)、町田清蔵(清水兼次郎、開成所諸生、15歳)、村橋直衛(橋直輔、小姓組番頭、23歳)、畠山丈之助(杉浦弘蔵、当番頭、23歳)、名越平馬(三笠政之助、当番頭、18歳)、鯨島誠蔵(野田仲平、開成所句読師、21歳)、田中静洲(浅倉省吾、開成所句読師、医師、23歳)、吉田巳二(永井五百介、開成所句読師、21歳)、中村宗見(吉野清左衛門、医師・博物学者、25歳)、市来勘十郎(松村淳蔵、奥小姓、開成所諸生、24歳)、森金之丞(沢井鉄馬、開成所諸生、19歳)、東郷愛之進(岩谷虎之介、開成所諸生、23歳)、磯永彦輔(長沢鼎、開成所諸生、13歳)、高見弥一(松元誠一、開成所諸生、31歳)と五代才助(後の五代友厚、30歳)の19名(カッコ内留学先での偽名、職位、年齢)を選び、イギリスに密航し留学させます。松木、五代の2人は、藩命により視察員外交使節の資格が与えられていたので、残り17人が留学生でした(林, 2010)。森金之丞(沢井鉄馬、開成所諸生、19歳)、とあるのが、森有禮です。

19歳: 1865(慶応元)年3月22日、長崎からイギリス船(オーストライエン号)に乗船し、

5月28日サザンプトンに着き、夜、ロンドンに入りました。森の留学の目的は海軍測量術研究でしたので、ロンドン大学化学教授A.H. ウィリアムスの指導をうけ、歴史、化学、数学なども学びました。因みにこの年アメリカでは南北戦争が終結しました。

20歳：1866(慶応2)年、8月から9月にかけてロシアの首都ペテルブルクを訪ね、ロシア文学や軍事などに興味を持ちました。ロシア旅行の途中、イギリスのニューカスルで、盲院を見学しています。

21歳：1867年春、フランスへ向かう途中、アメリカの宗教家ハリスと出会い、8月ハリスを頼ってアメリカへ渡り、ブロックトンのハリスの新生社(キリスト教のコロニー)に入り、勤労生活に入ります。ハリス教団にいた日本人留学生の間で分裂が生じ一部が脱退する騒ぎが起こります。このため留学生仲間の鯨島と共にブロックトンを出発し、6月日本に帰国し、二人は京都に滞在し、横井小楠を訪ねて交流しています。

(1868(明治元)年7月17日、江戸は東京と改称され、9月、年号は、「明治」と改元され、東京が首都となります。)

3. 官吏としてのキャリアを始める

22歳：1868(明治元)年、7月、徴士外国官権判事の職に就き以後、森は官吏としての道を歩むこととなります。9月には議事体裁取調御用に任じられ、11月学校取調を兼務、議事取調局に出勤、さらに東京在勤を命じられます。

23歳：1869(明治2)年1月、軍務管判事に任命され議事取調兼務、外国官権判事も兼務。この時、従五位下に叙せられます。

2月上京の命令で京都へ。滞京中、大阪に五代友厚を訪ねています。3月学校取調兼務を解かれ、4月には制度寮撰修となります。

5月 制度取調掛が設置されるとともに、これまでの職務を解かれ学校判事に、さらに

「本官をもって制度取調御用掛」となりました。

6月 廢刀案が否決されたのを機に辞職、下野して鹿児島へ戻り、翌年9月まで鹿児島の、興国寺境内で英語塾を開きます。しかし、辞職願は受理されず、1870(明治3)年9月東京出府を命じられ、10月東京へ戻ることになりました。

4. 再びアメリカへ、Dix との出会い

24歳：1870(明治3)年10月、少弁務使に任じられ、従五位に叙せられると同時にアメリカ在勤を命じられ、「交際事務官および留学生生徒管轄」の担当を命じられます。11月3日、アメリカに向け出帆、12月27日サンフランシスコに到着。

25歳：1871(明治4)年3月、ボストンで新島襄と会い、後に、脱藩した新島の留学生公認に尽力します。10月ワシントン着。

(7月、廢藩置県が行われ、文部省が設置され、8月、散髪、廢刀が許可されます。)

公務の傍ら、スペンサー(H. Spencer)、ミル(J.S. Mill)などの学説を研究。コネクチカット、マサチューセッツ各州の学校を見学するとともに、学者、文化人、政治家などと交流を深めます。

森有禮とDixが出会ったのはこの頃かと思われます。Dixが森の1875年の手紙を受け取る何年か前に、日本からの最初の外交官 Jugoi Arinori Mori(従五位森有禮)に会い、Dixは、自分のこれまでの活動について真剣に長時間にわたって語り、その際の彼の優れた知的能力と豊かな人間性を高く評価したと、書いています(Tiffany, F. 1891; Wilson, D. C. 1975; Colman, P. 1992)。

このDixとの対談で森は、精神障害者への人道的処遇の重要性を強く認識したに違いない、と筆者は考えます(アンダーライン筆者)。大久保ら(2015)は、英国留学中に自ら聾啞学校、盲学校を見学し、「嗚呼宜哉西洋の開盛なる事、斯かる聾啞盲等の人をも遂に不捨、

よく人間の事を教え辨え、生活を安く保たしむるハ可謂盛俟、餘之事ハ随而知るヘシ」(航魯紀行)、また駐米時代にも積極的に精神障害者施設等を見学したり、その一例として、森のサイン入りの「大学大丞殿」(英国留学生の学頭であった町田民部(後に久成)が、1870(明治3)年、大学大丞に就任していたので、町田にあてたものと思われる)宛のマサチューセッツ州立のノーザンプトン精神病院の年報(The 15th Annual Report of The Trustees of the State Lunatic Hospital at Northampton, 1870, 国立公文書館蔵)など関係文献を集めて日本に送っていた、ということを挙げて、森自身の中には障害者、医療福祉問題に対する関心は決して付け焼刃ではなかったと述べています。

5. 岩倉具視特命全権大使視察団との出会い

森有禮が日本最初の外交官(少弁務使、後に代理公使)として1870(明治3)年12月23日アメリカに駐在している時(1871年1月21日、森有禮26歳)に全権大使岩倉具視欧米視察団一行(以下岩倉視察団とする)がワシントンに到着し、欧米10カ国視察(条約改正準備と各国の状況視察)の旅をはじめます。

岩倉視察団の目的の一つが条約改正交渉にあったのですが、森の勧めやアメリカ側の思惑から、条約改正の予備交渉のはずが本交渉となってしまう、天皇からの委任状が必要だ、ということになりました。急遽大久保と伊藤は日本に取って返し、委任状を発行してもらうことになりました。二人がアメリカへ戻る期間を含めて岩倉視察団の滞在は長引くことになりました(泉, 1998)。

代理公使としての森の役割は前述のとおり「交際事務官および留学生徒管轄」であったので、視察団のアメリカにおける視察場所の選定や訪問先の施設との交渉に森は大きく関わっていったでしょう。そこに、医療社会福祉問題が近代国家を目指そうとしている明治新

政府に必要な課題の一つであるとする森の考えが読み取れます。

岩倉視察団は随員ら100人の大所帯でしたが、驚くほどの熱心さでさまざまな欧米先進諸国の産業・貿易、科学技術・政治・経済・教育制度、宗教、男女交際、家族関係などの関連施設を精力的に訪れ、視察してまわります。

特命全権大使米欧回覧実記(久米邦武編著: 2008a-e)でこの様子をみると、政治・経済、産業などを視察するのは当然のことですが、特に筆者の眼を引いたのは、多くの医療社会福祉施設や教育・司法関連施設が含まれていることです。例えば、サンフランシスコ市では、オークランドの小学校学校、カリフォルニアのストックトンの精神病院、ネヴァダのマウンテン・ホール・スクール、モルガン商業学校、ワシントン市黒人学校—奴隷制度の由来と廃止の事情、精神病院とその地下通風設備、ワシントン市内監獄、ニューヨーク市障害児病院、ワシントン市内監獄。イギリスでは、ロンドン市内の小学校、マンチェスター市巡回裁判所、エディンバラ市の高等裁判所、チェシャー州裁判所、ロンドン市海軍病院、フランスパリ陸軍病院、最高裁判所、監獄、聾啞学校、盲学校、ベルリン大病院、貴族病院、ロシアのサンクトペルク市孤児院、聾啞者施設、スウェーデン小学校—必須な普通教育、スイスベルンおよびジュネーブ市小学校—普通教育などです。

アメリカをはじめとするこれら施設の数と多様さは、視察団の目的にしては少し範囲が広いように思われます。筆者は、そこに少弁務使森有禮の考えが反映されていると考えました。彼は、案内する施設を選びながら、岩倉をはじめ日本のリーダーたちにDixの考えをじっくりと丁寧に実地に教え、日本にもそれらが必要であることを訴えたのではないのでしょうか。また、同時に森は、多彩な視察団の面々と交流を深め、人脈を広げていったの

ではないでしょうか。

6. 英国特命全権公使から彼の死まで

27歳: 1873(明治6)年3月、アメリカより賜暇帰朝により帰国。8月福沢諭吉、西周、西村茂樹、中村正直らと「明六社」を結成、会長となりました。9月、全権大使岩倉具視欧米視察団が帰国。

29歳: 1875(明治8)年2月、広瀬阿常と結婚。6月、外務大輔に任じられ、11月正四位に叙せられ、11月特命全権公使として清国駐在を命じられる。12月神戸から北京へ向かう。Dixへの手紙はこの時に書かれています。

32歳: 1878(明治11)年2月、「御用有之其官事務見計帰朝」を命じられ、3年間の清国勤務を終えて帰国、勲二等旭日重光章を授与され、6月外務大輔に任じられます。

33歳: 1879(明治12)年11月、特命全権公使英国駐在を命じられ、12月横浜出発。

34歳: 1880(明治13)年1月、ロンドン着、2月ビクトリア女王に謁見

38歳: 1884(明治17)年1月、帰国命令を受け、2月ロンドンチャリング・クロス駅を出発、3月仏郵船オルガ号で横浜港着、帰国。

39歳: 1885(明治18)年2月、文部御用掛、5月参事院議官を命じられる。文部御用掛として学事巡視のため京都、大阪二府兵庫、滋賀、岡山、広島、徳島、高知、愛媛7県を60日間にわたり長期出張視察。12月第一次伊藤内閣に入閣、初代文部大臣となる。

40歳: 1886(明治19)年3月、勲一等に叙せられ、旭日大綬章授与。11月夫人阿常と合意の上、離婚

41歳: 1887(明治20)年、日本全国を視察・講演旅行。6月 岩倉具視五女寛子と再婚。

42歳: 1888(明治21)年、日本全国の視察・講演旅行。

43歳: 1889(明治22)年2月11日、大日本帝国憲法発布の日の朝、公邸玄関で刺客の西野文太郎に襲われ、重傷を負い、翌12日午後

11時30分死去。43歳の短い生涯を閉じました。大日本帝国憲法発布、「皇室典範」制定。

経歴を通して森有禮の歩みを概観すると、明治維新の直後の日本の教育制度の基礎を整えていった官吏としての顔と医療福祉制度の萌芽を育んだ啓蒙家としての影の立役者としての一つの顔が見えてきます。

II. 京都府癲狂院の設立とその後

再び、Dixへの手紙に戻しましょう。文中にある公立の精神病院(京都府癲狂院)は、いつ誰によって建設されたのでしょうか。

明治維新によって、首都が東京に移ると、京都は首都としてのかつての華やきを失い衰退しはじめます。これを憂慮して東京に対抗するために京都の為政者たちは、琵琶湖疏水、インクライン、日本初の水力発電所、その他電気で動く路面電車などの独創的事業等を考え出しました(財団法人川越病院の沿革, 2015)。

医療面では、

1870(明治3)年、種痘館・療病館における
検査

1872(明治5)年、療病院の建設とドイツ人
教師の招聘

1873(明治6)年、栗田口の解剖場の開設

1875(明治8)年、西京に塵芥収集処理場、
南禅寺に日本最初の公立癲狂院開設

1876(明治9)年、建仁寺に驅黴院開設
などがありました。

歴史的に京都には、精神障害者への治療として、岩倉大雲寺・久世郡大日堂などで滝に打たれたり、霊水を飲むと効くなどの言い伝えによる治療の試みがされていました。なかには、人道的な取り扱いがされず、患者に虐待を加えているという訴えが初代京都府知事の元に出されたことがあり、査察をするという事例も起こっていたといわれています。

療病院建設と共に、癲狂院の設立を建言したのは、第2代京都府知事榎村正直、科学者明石博高、山本覚馬(京都府顧問、新島襄の妻八重の実兄)らであったといわれています。明石博高は西洋医学のみならず薬学、化学の知識もある科学者でありました(明石, 1916)。これらの人々の識見と弛まぬ努力と京都市民の経済的人的協力があつたといわれます。特に永観堂禅林寺住職東山天華は募金活動を行って巨額の資金を集め、癲狂院開院後は事務職として働いたといわれています。癲狂院は、療病院の管理下におかれまして(明石, 1916; 京都府医師会医学史編纂室, 1980)。

一方、設立の経緯について「統南禅寺史」は、「京都府は明治8年5月に癲狂院設置を決定し、施設として南禅寺に眼をつけ、寺の嘆願も無視し、大切な方丈の明け渡しを言い渡し、その上帰雲院客殿も提供するように求め、国宝に属する文化財を癲狂院に使用する暴挙云々」(京都府医師会医学史編纂室, 1980)と書かれています。明治維新の廃仏毀釈運動や仏教に対する圧迫の様子が偲ばれ、療病院建設に百両、その上に方丈を荒らされる、との嘆きが記されています。はじめ仮病院として、京都府が借用していましたが、南禅寺の返還願いも空しく、1882(明治15)年10月、京都府が癲狂院を廃止するまで南禅寺には返還されず、廃止時、京都府は使用修理費として二千五百円を払っただけだった、と言われています。文明開化の陰の部分が見え隠れします。

その後、京都府癲狂院は、1882(明治15)年、経営不振により廃止となり、当時療病院掛李家隆彦・事務長役の棚橋元章・川越新四郎・永谷健次郎ら有志があとを受け継いで、建物、設備も新しくして永観堂に移り、私立京都癲狂院として再出発しました。

更に、1886(明治19)年3月、李家隆彦の辞任の後、療病院時代から勤めていた高松彝(つね)を院長とし、中野忠八・小田卯一郎、竹鼻仙右衛門・北村徳作・中村卯兵衛を加え

た、「永続有志者」らに、運営維持を委託しました。1896(明治29)年、創設時代より一人残った川越新四郎の個人所有となり、現在の地に移転して、1913(大正2)年、嗣子直三郎が院長になるとともに現在地に移転、新築して川越病院となっています(小野, 1994; 川越病院の沿革)。

上に述べたように、榎村正直、明石博高らのたゆまぬ努力によって設立されたことはわかりましたが、森と明石との間に病院設立の話合いがされたという実証的な資料が必要です。浦野(1982)はDixと森の面識は認められるとしても森—京都府癲狂院との関係を明らかにする裏付けを求め、佐々木(2004)は、京都府癲狂院設立に明石博高が関係しているとし(明石, 1916)、京都府癲狂院設立に森との関連する記述は認められないが、外国人教師の招聘や大阪病院や京都府療病院設立にあたって、明石も岩倉具視に相談していたことが述べられていること、岩倉と森との関係は森が岩倉視察団に参与していた歴史的事実から、京都府癲狂院設立には、Dix—森—岩倉具視—明石博高という関係が成立する、としています(佐々木, 2004)。

筆者も今までに述べた事柄から、森はDixと会った後彼女の考えに共鳴し、日本にも公立の精神病院を建設し、人道的な環境で恵まれた治療を受けさせたいと考えを持つようになっていたと思います。この頃に岩倉視察団と出会うチャンスが訪れました。森は岩倉具視をはじめ視察団の人びとに先進国の医療福祉施設を見せて、Dixの活動の意義とその必要性を認識させる場としたのではないかと考えます。岩倉視察団の人々に与えたインパクトと培われた人脈が、こののちの療病院並びに京都府癲狂院の設立につながったのではないのでしょうか。さらに森は41歳、明治20年6月、岩倉具視の五女寛子と再婚し、岩倉具視は森の岳父となりました。

Ⅲ. 東京府癲狂院の設立

Dix あての森有禮の手紙に述べられているもう一つの公立病院は、1879(明治12)年7月、東京府癲狂院として開設されました。1881(明治14)年、東京府癲狂院は向ヶ原に移転、1886(明治19)年、巢鴨駕籠町に移転、1889(明治22)年3月、東京府癲狂院は東京府巢鴨病院と改称、1919(大正8)年11月、東京府巢鴨病院は府下松沢村に移転(東京府立松沢病院)し、現在に至っています。

まとめ

佐々木(2004)は京都府癲狂院設立には、Dix—森—岩倉具視—明石博高という関係が成立する、と述べられています。本稿ではこの関係をさらに明らかにしようと試みました。京都府癲狂院の設立に関して、森と明石らとの間に直接の接点があったとする実証的な事実(文書等)は残念ながら見いだせません。しかし、アメリカでの森と岩倉使節団とのつながりは濃く、そこで培われた人脈はDixの考えを浸透させるのに十分であり、新島や山本覚馬(京都府顧問、新島の妻八重の実兄)ら京都在住の知識人との接点も有効に働いたのではないかと思われます。

参考・引用文献

明石厚明編纂(1916). 静爛翁明石博高略伝. 6, 京都, 鮮明社.
 Colman, P.(1992). Breaking the Chains. The Crusade Dorothea Lynde Dix. 37-135, NY: ASJA, Press.
 Gollaher, D.(1995). Voice For The Mad, The Life of Dorothea Lynde Dix. 115-450, NY, The Free Press.
 林 望(2007). 薩摩スチューデント, 西へ. 12-20, 光文社時代小説文庫. 東京, 光文社.

石井研堂(1969). 癲癲病院の始. 明治文化全集 別巻明治事物起源. 1140-1141, 東京, 日本評論社
 川越病院の沿革, 2015/1008, <http://business2.plala.or.jp/kawagoe/enkaku/hosoku.htm>
 泉三郎(1998). 堂々たる日本人—知られざる岩倉使節団—. 60-65, 祥伝社黄金文庫. 350, 東京, 祥伝社.
 小峯和哉(1999). 明治から昭和期における精神病院史. 臨床精神医学講座S1, 精神医療の歴史, 311, 東京, 中山書店.
 久米邦武編著・水沢周訳(2008a). 米欧回覧実記普及版, 第1巻アメリカ編. 東京, 慶應義塾大学出版会
 久米邦武編著・水沢周訳(2008b). 米欧回覧実記普及版, 第2巻イギリス編. 東京, 慶應義塾大学出版会.
 久米邦武編著・水沢周訳(2008c). 米欧回覧実記普及版, 第3巻ヨーロッパ大陸編上. 東京, 慶應義塾大学出版会.
 久米邦武編著・水沢周訳(2008d). 米欧回覧実記普及版, 第4巻ヨーロッパ大陸編中. 東京, 慶應義塾大学出版会.
 久米邦武編著・水沢周訳(2008e). 米欧回覧実記普及版, 第5巻ヨーロッパ大陸編下. 東京, 慶應義塾大学出版会.
 栗栖瑛子(2014). ディックス, D.L.の生涯とその業績—II—ライフワークとの出会いからその死まで—The Life and Work of Dorothea Lynde Dix—II. 佐久大学看護研究雑誌, 6(1), 63-64.
 京都府医師会医学史編纂室(1980). 京都の医学史. 814-843, 京都, 思文閣出版.
 大久保利謙編(1972). 近代日本教育資料叢書 人物第一 森有禮全集 第一巻. 201-235, 東京, 文泉堂書店.
 大久保利謙監修上沼八郎, 犬塚弘明共編(2004). 新修森有禮全集 別巻二, 解題篇. 36, 東京, 文泉堂書店.
 大久保利謙監修上沼八郎, 犬塚弘明共編

- (2015). 新修森有禮全集 別巻四 米国関係文書. 245-246, 575-580, 東京, 文泉堂書店.
- 小俣和一郎(2000). 精神病院の起源, 近代編. 19, 東京, 太田出版.
- 小野尚香(1994). 癲狂院の医学的背景. 保健婦雑誌, 50(4), 326-329.
- 佐々木秀美(2004). 明治時代におけるわが国の近代的精神医療の萌芽と挫折に関する歴史的考察・—精神病院設立経緯と精神障害者看護に焦点を当てて. 看護学統合研究6 (1), 1-15.
- Tiffany, F.(1891). Life of Dorothea Lynde Dix. Boston and New York, 360-361, Houghton, Mifflin and Company.
- 浦野シマ, 鈴木芳次(1977). ドロシア・ディックスと近代日本の精神病院の淵源—重要文献の発見. 看護, 29(3), 131-140.
- Wilson, D.C.(1975). Stranger and Traveler, The Story of Dorothea Lynde Dix, 93-325, NY: Little Brown and Company.